

ことば遊び雑貨店「何でもあり屋」

皿海 達哉

1

先日、不思議な夢を見た。自分が小人こびとになって花畑で遊んでいる夢だ。後で考えると、安房直子さんの『ハンカチの上の花畑』のようだったが、夢には佐藤さとするさんが現われて「ここで何してるの?」と、にこやかに尋ねてこられた。私は「ユウヨクしてるんです」と答えた。「ユウヨクって?」「遊弋と書くんだっと思えますが、弋には戈とタスキがけがあるかもしれません」。私は、そう答えて、大きな佐藤さんを見上げていた。——四三年間高校で国語の教師をやってきたけれど、黒板に一度も「遊弋」という字を書いたことがない。意味も分からない。それが心のどこにどうして留まっていたのか全く理解できない。

夢の中で俳句を推敲したこともある。「ほたる狩り今日ここまで
橋の上」とすべきか悩んだ。

橋は実在の柞磨橋つるまげ。有磨ありま小学校柞磨分校時代、その橋は、分水嶺のような役割を果たしていて、「蛍狩り」に限らず、そこから先に行ってはいけないという暗黙のバリアが張られていた。四年になって本校へ通うようになると、その橋を越え、埃っぽい長い県道を歩いて登下校する。麦が熟れるころは、左右全山からジージージー、単調でもの憂いハルゼミの声が降りそそいできた。

〈ことば遊び〉の一つに〈オノマトペ〉があるが、このハルゼミの声だけは「ジージージー」百万遍書いても同じ、眠気を誘う、生きているのが嫌になるような声だ。ハルゼミのメスは、本当にあんな声に惹かれるのだろうか。当時、私はまだ「孤独」「倦怠」といったことばを知らなかったけれど、その声には、子ども心にも人生をそう予感させるものがあった。

しかし、あんなにたくさんいたハルゼミもホタルもメダカも、今や完全に姿を消してしまった。寂しい。